わが回想〈聞き書き〉塩長五郎

自由人連盟・文学運動・そして消費組合……

戸駒恒世・編

私が生れたのは、一九〇一（明治三四）年三月七日。ところは現在の横浜市中区麦田町。八人兄弟の長男で第二子だった。

家は青果・乾物の小売商をしていたが、父は金沢の出身で、祖父の代までは近隣に名の知れた「塩屋」という屋号の大きなよろず屋をしていた。塩という姓もその屋号からきているのだろう。母は小田原の大工の棟梁の娘だった。その一族には大工・建具師などの職人が多かった。

一九〇七（明治四〇）年北方小学校に入学した。その後近くに開校した立野小学校に転校。学校では級長に命ぜられるなど優等生だった。

付近の裏山には外人居留地があり、小学校のころはこの外人の子供たちとよく遊んだ。その居留地の家にブランコがあったのをおぼえている。明治時代ブランコは珍しいものだった。

一九一一（明治四四）年小学校四年頃より、父親が病臥し、家の商売が思わしくなくなってきた。

一九一三（大正二）年立野小学校を卒業したが、家業の不振で中学校へは行けなかった。小学校の担当教諭が

「学費は工面するから進学させてやってくれ」と母を説いたが、職人の家の育ちの母は、商売にこりていたこともあって、手に職をつけさせるからとその申し出を断わった。そして母方の親戚にあたる西洋家具職の家に預けられた。

一九一五（大正四）年二月頃、小学校で成績を競った仲のよい友人が東京の芝中学に通っているのを知り、彼を頼りに家をとび出した。ところがその友人の住所〈仲門前〉（現在の芝大門周辺）を深川門前仲町と間違え探し当てることができなかった。金も泊まる所もなく新橋烏森の赤レンガ通りを露店を眺めながら彷徨したが、十時頃には店もしまい心細くなって夜通し京浜国道づたいに歩いて帰ったことがあった。

しかし何とかして勉強をしたかった。それから二ケ月ほどして、神田の苦学生職業斡旋所の新聞広告を頼りに再び家出した。その斡旋所は、一円二〇銭の入会金が必要で、持っていた金では足りなかった（家を出る時に持って出た金が一円二〇銭、そのうちから汽車賃・食事代などに使っていた）。

どこかで働いてその金を作ろうと思って、口入屋を探しながら上野まで歩いた。やっと見つけた上野広小路の桂庵で〈アンチ屋〉という小金物を作る町工場を紹介してもらった。その家は親切にしてくれたのだが、勤めはじめのとき、本籍などをいったので、桂庵は当然身元確認のために家に問い合わせた。それで家から早速叔父が迎えに来て、連れて帰られてしまった。家に帰ると母親がひどく怒った。

「そんなことをするなら、もう勘当する。」その当時、勘当は大変なことだった。やむなく先行きのことなども考えて落ち着くことにした。

そう決心したのには、仕事さえ覚えてしまえばあとはどうにでもなる。親戚での修業だから他人とちがっていろいろよく教えてくれる。ともかく仕事だけは覚えてしまおう、という心積もりがあった。

こうして十六才の時に、家具職人としての一応の仕事が出来るようになったので、叔父に東京に出してくれるように頼んだ。叔父も認めてくれ、家の母も許してくれた。

一九一七（大正六）年の二月頃上京して東京商業学校夜間部に入学した。商業学校を選んだのには、家を再興しようという気持ちがあったからである。この学校は商業の夜間部にもかかわらず、きちんと入学試験があった。

新学期からは家具職人として昼間働き、夜学に行くという生活が続いた。学校に通って一年ほどするうちに、〈大倉喜八郎〉とか〈浅野宗一郎〉とかいわゆる立身出世した大実業家を最高の人としてその伝記を読んでいるのが馬鹿らしくなってきた。それと反対に未知の世界への知識欲のようなものがもりもり湧いてきた。それで一九一九（大正八）年の新学年から同じ神田の向い側にあった錦城中学夜間部の三年生に転入した。

もちろんその間もずっと家具職人として働きつづけ、仕事もよく出きる方だった。それで、中学四年を修了する時に当時〈新家具〉の運動を提唱していた、東京高等工芸学校に新設された家具科の教官の小暮先生に誘われ、中学五年と並行して同　に通うことになった。

社会主義運動に入る

一九二一（大正十）年当時しだいに盛んになっていた社会運動に興味をもちはじめた。友愛会の指導していた日本橋三越の争議を見に行き、まきこまれて新場橋署（現在の中央署）に検挙された。その留置場で、日大の学校騒動で放校され浪々としていた、八幡博道・浦田武雄と同房になった。それ以来彼らと親しくなり、労働運動社堺利彦の所などに連れて行ってもらった。山川均の「社会主義者の社会観」大杉の「労働運動の哲学」を借りて読むようになった。

また加藤一夫と引き合わせられたのも同じ頃、八幡博道によってだった。だから私にとって、この三越の争議は社会主義運動に入る契機だったといえる。当然学校の方は疎遠になり、やがて中退ということになった。

自由人連盟

加藤一夫に引き合わされてすぐに自由人連盟に入った。入ったとはいってもその当時の団体の殆んどがそうだった様に、加盟などという大げさなものではなかった。自由人連盟の宣言というのがありそれを渡されるぐらいのことだった。その宣言には「我らは我らである…」というようなことが書いてあった。だから誰が自由人連盟の会員だったとか、全体の人数とかははっきりとしていなかった。八幡博道にしても、自由人連盟に入っていたり、暁民会に入っていたり、一人で色々な所に籍をおいていた。その頃では殆んどの人がそういう風に色々と入っていたから別に珍らしくはなかった。

自由人連盟で事務所にあたるところは、その当時東中

野に住んでいた加藤一夫の自宅だった。（その後、神田・駿台クラブに「自由人売文社」の看板を掲げたが、後述するように兵役中だったので直接は知らない）ここに出入していたのは、佐野袈裟美・津田耕造・川崎春二・角園善之介・吉田金重らだった。活動としては機関紙「自由人」の発行と演説会の開催、他には時折り会合をして寄り集まるというようなことだ。私自身は社会運動に入りたてのいわば駆け出し時代で、「自由人」に何かを書くということもなく、ビラ撒き、ビラ貼りなどを熱心にやった。

自由人連盟がいつ解散したのかはっきりとしらない。それには私が東京にいなかったせいもあるだろうが、大震災によってはっきりとしないまま消滅したのではないかとも思う。

ともかく、自由人連盟の中心、加藤一夫は震災時に保護検束されていたが、釈放と同時に東京周辺からの退去命令が出された。そして部落ちして芦屋に転居した。行動の自由を奪われ、追いたてられ、同志から離れて芦屋へ落付いた。国家権力に対する、歯がみするような口惜しさが溢れていただろうと思う。

「死ぬにしても、生きるにしても、我等は虚無の海の一波一浪にすぎない」これは加藤一夫が芦屋に転居してのち初めに届いた、個人誌「原始」の挨拶状にあった一節で、いまでもよく記憶している。「原始」は、約めていえば、「原始」の立場にたち戻って、人間の「食べる」という問題を起点としなければならないというように、そして次第に明確になってくる彼の農本主義の立脚点ともなった性格をもっていたといえるだろう。

一九二一（大正十）年五月九日、社会主義同盟の第二回大会の日のことがとくに記憶に深い。それは当日がちょうど私の徴兵検査と重なっていたためだ。横浜の実家から検査場に行き、甲種合格となった。自由人連盟として大会で撒くためのビラは前日すでに渡されていた。それを実家にとりに寄ると、家族の引きとめるのもきかず会場の神田、キリスト教青年館に向かった。夕刻、会場に着いたがすぐに解散になってしまったので、一人で近くの駿台クラブにあった労働運動社を訪ねた。労運社には誰もいなかった、というのも当然で同盟の大会のために殆どの社会主義者は事前検束に遭っていたのだった。その頃の駿台クラブには二階にオーロラ協会（明治大学学生を中心とした社会主義団体）の事務所もあったのでそちらものぞいた。（当時の社会主義団体の事務所という

と、互いに出入りが激しく、とりわけ同じ建物の中にあった労運社とオーロラ協会はどちらにでも両団体のメンバーがいた）オーロラ協会では、赤瀾会の女性たちが数人いて、伊藤野枝が朝日の記者の取材を受けているところだった。野枝の他には、秋月静江・高津妙子・中名生イネ子（幸力の妹）・田中マリらがいた。

甲府連隊時代のこと

その年（大正十）の十二月十日入営して、甲府連隊に配属された。社会主義者として、ブラックリストに載っていたので十二年のくれに除隊する時にも一等兵以上は進級しなかった。

甲府にいる間は、甲府在住のアナキスト・矢崎源之助の家に外出毎に訪ねた。甲府の書店に本を買いに行くと偶然彼の発行していた社会主義の雑誌をみつけ、それがきっかけで訪ねたのだった。

矢崎の家にはちょうど、渡辺政太郎の未亡人・渡辺八千代が滞在して若いアナキストの面倒をみていた。私は外出日の殆どを、この矢崎の家で「渡辺の小母さん」らと雑談して過ごしていた。

軍隊では、O・ワイルドの「獄中記」と、辻潤の訳によるM・スチルナーの「自我経」を持っていた為に、一カ月間の外出止めを受けたことがある。問題にされたのは「獄中記」の方で、「自我経」は処罰の対象には、ふくまれていなかった。その「自我経」は前半が「人間篇」として以前に出版された時、加藤一夫が「近く全篇が〈自我経〉として出版されるから読んでみろ」と勧めたので買い求めたものだった。

外出止めが解けて、矢崎の家を訪ねると、「ずい分来なかったけど、どうしてたの」と聞かれた。事情を説明すると、渡辺の小母さんは「じゃあ〈自我経〉はお経と思われて、スチルナーもついに仏さんにされたんだね」と笑いながらいった。

渡辺の小母さんの印象は、朗らかな、いかにもそこいらにいる〈おばさん〉という風だった。厳格な夫人という感の強い加藤一夫の奥さんと対照的に、この二人のことを思い出す。

後日談になるが、除隊後、赤坂山王町で行われた大正十三年のメーデーでは小母さんと、一緒に行動した。そのとき小母さんは、被布の下の着物の裾をはしょっているのを見せて「動きやすいようにこういう風にしているのよ」と自慢していた。政太郎の死後も運動との関わり

を持ちつづけていたことが、この一事の中にもはっきりとあらわれている。

プロレタリア芸術研究会のころ

一九二五（大正十四）年に「プロレタリア芸術研究会」というグループをはじめた。会員には、立野信之・内藤辰雄・堀江カドエ・村田某、それに東大の学生などを加えて十名ほどがいた。その当時、文芸戦線系には青野季吉などの一流の評論家が参加する「プロレタリア文学研究会」というのがあった。それに対抗して、内藤辰雄などかけだし連中と一緒に、「芸術」の方が巾が広いからと、芸術研究会という名称で始めたのだった。

この研究会が何とか軌道に乗り始め、機関誌も出そうなどと話が出た頃に、青野季吉の目的意識論が発表された。そしてこの論文が私達に与えた衝撃は今の人には想像できない程大きかった。その是非を問わず、いままであいまいなままですましてきた各自の立場をどうしてもはっきりとさせなければならなくなった。寄り合い世帯だった研究会は、これによって立野は〈文芸戦線〉の方につき、私と内藤はそれに強硬に反対という様に溝ができてしまった。

実際運動では、すでに中央集権主義と自由連合主義（ボルとアナ）という形で分かれていたが、文学運動ではそれほど明確になっていなかった。それが目的意識論によって、ただ友達だからということでは、もはや一緒にやっていくことができなくなってしまったのであった。そして分裂を誰に強制されたということではないが、ついに芸研も自然消滅ということになった。

私は立野や山田清三郎らと親しかったが、それ以降は行き来がしにくくなってしまった。あのはじめての分裂の嫌な気分は今でもはっきりと覚えている。

『黒蜂』

一九二八（昭和三）年の夏、文芸思想誌と銘打って同人雑誌「黒蜂」を創刊した。これには五人の同人が参加した。芝田村町の貸席の息子・鏑木順は論文などは殆んど残さなかったが、物文、詩などをよく書いていた。同人の会合を彼の家でよく開いたこともよく覚えている。戦死したという。外には三宅哲次郎の名しか覚えていない。発行人には私がなっていた。

その頃アナ系の同人誌では「無政府個人主義を排せ！」という主張が盛んに出てきていた。「二十世紀」「黒色文芸」などで鈴木靖之・松村元（潔）らがさかんにそれを書いた。

その主張が出て来た背景には次の様なことがある。当時ボルの方では、唯物弁証法的国家論というのが盛んに言われていた。彼らは「自分達も国家を廃止することには同感だが、アナキストのように即時に廃止するという論理は誤まりであり、弁証法的に国家を死滅させてゆくという方法論つまり現実的には段階的な過程を経なければならない」という風にアナキストを批判していた。それに対抗して、無政府主義陣営の内部の論理の整理という形で「無政府個人主義を排して無政府共産主義へ」という主張が出された。いまおもえば、それはボルの〈弁証法〉に追いつめられたんだという気がする動きであった。

その主張の内容はつまるところ「アナキストの側でも一回きりの革命で国家が廃止出来るとは思わないが、国家を解体してゆく過程でそれに代わりうる〈自治体〉を強固にし、その自治体が労働者農民の真の会議になるような組織体にしなくてはならない。そうしない限りアナキズムの思想に基いた国家を廃止する論理は出てこないだろう。その為には無政府個人主義は排さなければならない。」というようなことである。それは結局M・スチルネルの思想は無政府主義運動のなかから排さなければならないということだ。ところが私自身はもともとスチルネルの思想に多く影響を受けていた。そこで「黒蜂」誌上に、「スチルネルの去就について」という論文を書いた。〝去就〟というのは要するに、スチルネルの思想の〝採るべき点〟〝採らざるべき点〟を明らかにするということで、そのことを訴えたかったわけだ。

その論議を契機にして、「黒色文芸」「二十世紀」それと「黒蜂」の三つで合同しようということになった。

黒色戦線の経験

一九二九（昭和四）年一月に創刊号が出された「黒色戦線」は、このようにして三誌の合同したものだった。評論・小説・詩などが掲載されていた。この三誌の合同で同人がどうなっていたかということや正確な人数などはいまわからない。署名人は星野準二、発行所は大井町にいた私の所だった。執筆者には同人の他にも石川三四郎・森戸之介・高群逸枝などがいたがこの頃の直接の記憶はあまりない。

※「黒色戦線」は従来の「黒色文芸」「黒蜂」「二十世紀」の三雑誌を合わせて、茲に新たに無政府主義芸術運動の戦線の尖鋭化を企て、同時に我々はこれを具体化し実践して進む。

※我々はブルジョワ的・ボルシェビキ的、一切の強権的なる似而非芸術を排撃し、撲殺して清新なる我々の芸術運動を果敢に展開せしめる！

※「黒色戦線」は来春一月創刊号より毎月一日発行として続刊してゆく。今まで以上の三雑誌の各々に集注されていた熱意を、更に陣容を強固ならしめた「黒色戦線」のために充満さして戴き度い。

これは「自由連合新聞」30号（昭和三年一二月）に載った黒色戦線の広告だ。

その後同年四月に2号を発行し、3・4号続けて発禁になった。この年の末までだから発禁を含めて7～8号を出したと思う。

この雑誌の評論を扱っている同人で「無政府個人主義を排して無政府共産主義へ」の問題が転じて、クロポトキンを研究してみようという話がもち上がった。実際運動の側からの策動が始まったのは丁度そのころだった。

前年（昭和三）の三月に、全国自連の第二回大会で純正アナキズムとアナルコサンジカリズムの両派が分裂した。この年にはアナルコサンジカリズム系が「日本自協」を結成、という情況が文化運動の局面にも影響しはじめたのだった。それは例えば〝階級闘争〟と言えば、即座に「階級闘争というのはマルクス主義だ」というようなきわめて不毛な事態だった。

此の年の十二月に「黒色戦線」は廃刊した。

自由連合新聞の昭和五年十一号には「不純分子を一掃『黒旗』発刊さる」と題する記事の中で、この分裂のことをいわゆる純正アナ派の立場からは次の様に書いている。

（全文）

『アナーキズム文芸雑誌と銘打って発行されていた「黒色戦線」は従来の内容にマルキシズム的、文芸至上主義的臭味を多分に持っていたため心ある同志の中では早くからボイコットされていたものであったが、昨年の八・九月頃より内部にそれらの排撃運動がおこり、ボル的・あるいは文学青年的論文，創作・詩等に対しても鋭い批判と清算が続けられていたが十月十一月頃に至り彼等不純分子を徹底的に排撃する為に特別な研究会が開かれ同志八太氏の「階級闘争説の誤謬」を中心に塩・植田等の思想は検討されて彼等が発表した論文の中にマルキシズムの中心思想たる階級闘争説・唯物史観説・弁証法等々の見解に基いているものの多いことが指摘され彼等もついに自己の犯せる誤謬を認めたために一先ず一諸にやっていたが又々、十二月号に現われた丹沢の社会時評等が依然としてサンジカリスト的見解より一歩も出ていないことが認められたので、彼等文学青年が仲々にそうした見解から抜けきれないのは従来の生活環境等からくるものであるし、大切な場合裏切られるよりも今のうち排撃すべきであることを知った多数同人は彼等を放逐して新たに雑誌「黒旗」を創刊した。塩一派文学青年等も近く雑誌「黒戦」を創刊するそうだが、例によって無産政党の如く〈大衆的〉をモットーとしているから近く大衆の如く無思想になって姿を隠してしまうであらう。我等はあくまでも〝黒旗〟を守る。

私自身の記憶では、この分裂に至る過程で大きな役割りを果たしたのは、当時「自由連合新聞」の編集をしていた大塚貞三郎が黒色戦線の編集部へ来て色々な邪魔をして、分裂させようとしていたことだ。

私はここで「サンジカリスト的見地から抜けきれない文学青年」と言われたけれど、自分ではあくまでもサンジカリストではなくアナキストであると思っていた。「階級闘争なんて言う奴はサンジカリストだ」と単純にきめつけられてしまったが、しかし階級闘争だけを革命論の中心に据えたわけでもなく、大衆運動のひとつの形態として〝階級闘争〟を主張したにすぎない。〝階級闘争〟という言葉のみを捉えてボルと決めつけ、大衆運動をないがしろにしていった、それは文字通り不毛な分裂だったとおもう。そして内部的には殆ど問題のなかった「黒色戦線」が解体しなければならなかったということにもっぱら他からの分裂の持込みというのがこの場合の実態だったといえるだろう。

黒戦の発刊

一九三〇（昭和五）年「黒色戦線」の同人の多くによって「黒戦」を創刊した。丹沢明（青柳優）・森辰之介山岡英二・浅弘児（浅井十三郎）などの同人がいた。

創刊号には次のような宣言が掲載されている。

我等唯一の無政府主義文芸思想雑誌〈黒色戦線〉は

過去一年の歴史をとどめて分裂し解体した。

その依ってもつ所は、過去に巣喰える観念論の放棄である。今や我等は二つの対立の中に勇猛果敢に全力を以って戦うべく、対内的には実践によって彼等の誤謬をあばき、対外的には新しき闘争手段をいよいよ拡大し……

私はいつも、評論といっても基本的な事を主に書いていたので、黒戦をはじめた時にも私がひっぱっていったように思われていた。

此の年「黒戦」の新聞紙法違反で百円の罰金を受けた。全額を一度に納入することができず、分納を申請したが却下された。その当時、思想犯の分納は認められないのが通例だった。山崎今朝弥に相談すると「警察の目を逃れて五〜六年転々として、その間に罰金の額を貯めるのが一番利口な方法だ」と言われた。

一九三〇（昭和五）年十一月、山崎の言葉に従って押上に転居した。押上、請地、吾妻町を転々とした。その間「塩長　三郎」という偽名を使用していたが、二年程のうちに判ってしまった。警官が検挙に来た時、裏口から逃げ出し、妻と子供が押上駅前の交番に連行された。これを見た近所で歯科医院を開いていた府会議員が、見かねたのか身元引受人となって釈放された。その上分納が許可される様に手を回してくれた、警察さえも手を出せない〈議員〉の権威に驚嘆した。

アナキズム文学のこと

一九三二（昭和七）年「黒戦」の罰金の完納を期に「アナキズム文学」を創刊した。この当時思想雑誌には多額の保証金が必要だったので、この雑誌は〈文学雑誌〉と称して発行した。

私は創刊号に「アナキズム文学の主要主題について」という論文を書いた。この論文は飯田豊二が非常にほめてくれた。

この論文で言いたかったのは、「黒戦」などの雑誌に来た投稿などで感じたことだった。その原稿たるや、叛逆とか何とかアナキスティックな言葉はちりばめられているけれど、実質はボルの「戦旗」に載せてもおかしくないようなものばかりであった。そこで、これはいかにもアナキストの文学だな……というような目安を打ち出したかった。そこでアナキズム文学の主要主題は何かと考えると、アナキズムのマルクス主義との相違点は、国家を廃止するという一点にあるということだ。そこで、

国家を廃止するにはどうしたらよいかということに問題を集中しなければならない、そこにアナキズム文学の主要な主題があると論じた。同じプロレタリア文学でもアナ文学とマル文学のちがいはそこに集中的に表われている。勿論これは〈主要主題〉であり何が何でもこれをかかなくちゃならないということではない。ただ、集中すべき主題の相異を明確にしなければならないと考えたのだ。「アナキズム文学」は同年中に三冊を出して廃刊され、後に「解放文化」「文学通信」などが続くことになるのである。

『文陣』

一九三四（昭和九）年、青柳優（文陣ではこの本名に戻っていた）と共に文芸同人誌「文陣」を創刊した。思想誌としての性格が全くなかったことは、執筆者の中に唐木順三なども入っていたことを考え合わせると理解できるだろう。表紙は創刊号から無名の版画家・棟方志功の作品で飾られた。

この同人誌は、一九三九（昭和一四）年まで続けられた。私はこの間「ドストイエフスキーとヘーゲル」「芸術と無の観念」「芸術的世界観」などの論文を書いた。

「文陣」時代は、新進の評論家として、文学雑誌「文芸」同人雑誌評で誉められ、青柳優らに評論家として世に出るべきだと勧められたが、それを果たせない幾つかの理由を負っていた。

一つには次項にも述べるが、加藤一夫の手助けをして押上近辺で牛乳消費組合運動に着手した矢先であったこと。今一つは育ち盛りの子供四人をかかえた生活苦で文筆に専念することは不可能だったこと。そして何よりも大きな理由は、時代状況自体が「書きたいことを書けない」方向へと明らかに進んでいたことである。商売となれば、舌先三寸でゴマ化してウソを書かねばならない。しかし私の様に不器用な者にはそれは絶対に出来ないと思ったのだ。

「文陣」での論文の中心になるのは「芸術的世界観」だった。以前に発表した「平林初之輔の二元論と一元論者の弁証法正体」の続続編にあたる一種の弁証法批判である。平林の二元論とは、「作品」を「政治的価値」と「芸術的価値」の二つの点から評価しようという、当時では新鮮な批評論であった。文芸批評の常套手段として「文学的価値」という云い方をするが、その様な曖昧さは否定するべきものだ。「文学的価値」という紛飾をす

る印象批評に、科学的・社会的批評論を確立してゆくことこそが重要なのである。

だから平林が単なる〈印象批評〉にすぎない〈文学的価値〉のあいまいさから離脱するために、〈政治的価値〉と〈芸術的価値〉の二つに分折したことは評価すべきだと思う。

ところが、平林の二元論はマルクス主義の言語論から逸脱しているので邪道ということになっている。しかし、我々の側から見ればこれは科学的批評論として積極的に評価すべきだと思うのだ。ブルジョア文学に対しては意味をなさないが、プロレタリア文学を探る時には重要な意味をもつだろう。とりわけ、プロレタリア文学としてアナキズム文学が正当かマルクス主義文学が正当か、ということを考える時には欠くべからざる要件である。私の一番主張したかったのは次の点である。社会における芸術的価値を明確にすること。これはマルクス主義文学では政治的価値を重視するが、アナキズムは原点において政治的価値よりも芸術的価値を認めるものだ。

以上のことを、芸術の社会的、芸術的価値というのは何なのか？ということを含めて、書いたのである。

芸術というとひどく神秘的で高級なものと解釈されるが、私はそう思っていない。むしろ誰でももてるものであり、誰でも持つべきものであると思う。

芸術家というと、小説家や音楽家や画家などを思い浮かべ、立派な家を建てる腕の良い大工をその中には入れない。「あれは職人だから」ということになる。職人は技術であって芸術ではないと言い切ってしまうのだ。しかしあれとて芸術ではないのか？

ではどこが芸術と技術の違いかというと、例えば「勘の良さ」ということだ。同じものを作っても勘の鋭いものと勘の鈍いものとの間には歴然とした相違がでてくる。だから芸術というものは勘の鋭さの様な中に表現の相違がある筈なのに、芸術と技術を区別して〈芸術は技術よりも高い〉等と芸術に神秘性を与えてしまうと、その価値の相違が明らかにならなくなるのだ。良い芸術・表現とはこういう事だという裏付けがなくなってしまうのだ。

私は技術なしに芸術はあり得ないと思っている。それを明確にしなければ現実の芸術にある神秘的なベールの誤りを正すことができないのだ。

その意味で現在の芸術をもっとこきおろし、終らせてしまい、そこではじめて〈アナキズムの芸術〉というものが登場するのだ、という書き方をしたのである。

牛乳消費組合運動

「文庫」と併行して、加藤一夫の手助けをして、本所で牛乳消費組合運動をした。その頃の牛乳といえば高価なもので、立派な門構えのある家と裕福な病人しか飲めないほど高価なものだった。それを安価に販布することと、もう一つの農村と都市部の直結ということを目指してこの運動が始められた。

〈東京府畜産農業協同組合〉の中沢文治郎の世話で牛乳は「畜産牛乳」を仕入れることができた。ところが消費組合としてやっていくためには組合員が必要で、それを募集する為に苦労をした。ってをたよって愛育会の横川出張所、本所区役所などの大口をつかむことができた。そこでなによりも問題になったのは、明治、森永などの大手メーカーの悪質な妨害であった。「残乳を処理したもの」だとかのデマをとばし、組合員の切り崩しが行なわれた。しかし、通常七銭も八銭もする高価と思われていたものが四銭か五銭で販売することが出来た事は一結局私と加藤一夫の住居のあった高円寺付近にしか運動を広げることができなかったが一一つの意味を持っているだろう。

次第に社会状況は戦争へ向かい、牛乳の統制がしかれこの運動も終ったのである。

読書／精神の暗黒世界への航海
そして航海の果て　あなたの
黒き創造力を噴出せしめるために

性とアナキズム——小川正夫評論集

小川正夫は、戦後一貫して日本アナキスト連盟に係わり、精力的に評論活動をつづけた。この本には、46年の結成から68年の自己解体にいたる〈アナ連〉（ＪＡＦ）の理論的・実践的課題のほとんどが提出されている。ＪＡＦの批判のために、あるいはその内部論争の遺産の継承のために、特にＪＡＦ以後の若い世代に強く薦める！（小川正夫評論集刊行会／定価六〇〇円）

アナキスト詩集（秋山清編・解説）

萩原恭次郎から向井孝まで、戦前戦後一〇名の詩人の作品によるアンソロジー。読者はこれによって〈アナキスト〉詩及び詩人の流れの大凡を把み、さらにその落丁を補いつつ読者自身の幻の詩集を編まねばならぬ。（海燕書房　一八〇〇円）

〈イオム〉 6号

合評会（独断的印象）の記

九月二二日（日）午後一時よりサルートンにてひらかれた。同人・読者らで部屋は一杯。参加者一八名。

合評に入るに先立ち、同人の日野さんが病臥しており、当分起きられぬだろうという報告、最近京都東京でイヌがしきりに市民に噛みついているので用心した方がいいだろうという話があった。

《労働に関する断章》 日野善太郎

まず書き方・文章について論議があった。いわく「冗長だ」「横道が多すぎる」。これに対して「自分の考えを確認しながら書いているのだ」「以前より良くなっている」と弁護があった。内容については、「割合常識的で、期待はずれの憾あり」という意見。〈私有・専有・共有〉という所有の三区分に話が集まった。〈私有〉をいう前に〈所有〉を説明しなければという指摘であった。〈所有〉および〈労働と自由〉について論議が展開しかかったが、これは時間がない理由で中断された。（好みの問題を別にすれば僕はこの修辞の多い文章があまり好きでない。それと既に用いられているコトバを通例と違った意味で用いる時は、もっと注意すべきだと思う。内容の論議をコトバの論議にすりかえさせないためにも、である）

《風景》 山口英

どういえばいいのだろう、山口さんの詩については論議が固定してしまうようだ。「どうも変りばえしない。もっと別な方向に変ってもいいのではないか」「素材も固定している」「しかし素材についても、それを取上げる自分（詩人主体）が変らない限り変りようがないだろう」という意見に対し、「いや、山口英はいまや最高の城に入っているのだ」。これについて、詩人より一言あるを期待したい。

《ある疑問のとばくち》 寺島珠雄

〈とばくち〉の意味から入っていった議論は今回の合評会中一番さかん（相対的に）であった。話は文章の最後の部分を焦点としてアナキストと天皇制を中心として進み、中本彌三郎なる人物からはやや遠くなった。又筆者自らの話から察するところ、中心は最後の一頁、その前六頁ばかりはそのための導入部のようであった。いかに〈とばくち〉であれ前をもっと端折って〈疑問〉の意図をもっと明確にした方がよかったのではないかと思う。

論議の中で目立ったのは、政治体制ではなく〈文化存在としての天皇〉の現実性は否定できない。という議論であった。〈文化的伝統〉としての天皇制は共同体意識を堀りさげれば出てくるという話である。〈文化的存在としての天皇〉制が何を指すのかについては提起者の展開を期待したい。今一つ、それに関連して目立ったこと。マルクス主義者にとっての〈国家〉とアナルシストにとっての〈天皇制〉は類似的関係にあるのではないか。そして政治的イデオロギー的にとらえられる国家に対し、精神的丸抱え的な天皇制はよけいに厄介であろう。アナルキストはマルキストほどには天皇制を排除しにくく、その点十分な解決がなされていない、それを客観化・自覚化した次元でやっていないという弱さが指摘された。そんな論議を聞きながら、日本人にとっての天皇制はヨーロッパ人にとってのキリスト教体制に比較できようから、バクーニン・クロポトキンの著作に案外のヒントがあるのではないかな、とぼんやり考えていた。

《雑記》

時間の都合で駆け足。残念デス。

《江西一三とその時代》 向井孝

江西さんご本人を迎えての合評会である。江西さん自身が、当時の記憶をたよりに若干話しをされた。

今後の運動史的課題として、戦後アナキズムの側に残った者と、ボルに転向した者との間にどんな違いがあるかを調べてほしい。あるいは当時の個々の争議についてくわしく別稿で書いてほしいという要望が出された。

合評会はここで終り、この後九月中旬開かれたアナキズム三誌を中心とする交流会の報告が出席者よりなされた。（本号二二頁参照）

この報告のために合評会そのものは時間的に先を急ぎ、若干低調気味であったのは残念であった。

五時に終了。（草）

……前号訂正とお詫び……

前号所載《江西一三とその時代》中、次の個所を訂正しお詫びします。

60頁4行目　大阪製鑛→大阪製鎖

同　5行目　（西淀川区福田）→（西淀川区福町）